狭間の世界の白い花

三沢緋夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狭間の世界の白い花

【Ｎコード】

Ｎ５１６２Ａ

【作者名】

三沢緋夏

【あらすじ】

現世とあの世の狭間にやってきた渚と爾。共にすごす時間が増えれば増えるほど２人は仲良くなっていくが、ある日気づいてしまう。自分たちの存在に――。

第1章～2人の少年～

――――菊池渚（きくちなぎさ）

もう・・・・
もうイヤだっ・・・・・！！
・・・死んでやる。
今すぐ死んでやるっ！！

僕は今、開かずの踏切と呼ばれる踏切の中にいた。
目の前は涙でぐちゃぐちゃになっていてよく見えない。
次に踏切が開くのはたぶん1時間後。
もう空は黒く染まっている。
踏切の前には数人のサラリーマンや女子高生、大学生などが次に開くのをまっている。
僕は見つからないように、近くの草むらに身をひそめている。
僕は次に電車が来るのを、待ち望んでいた。

――――僕の名前は菊池渚。
１６歳の南古町高校の２年生。
５年前からいじめにあっている。
理由は・・・わからない。
きっと楽しみがないからとか刺激がほしいからとか・・・そういう理由なんだろう。

母さんは7年前に父さんに愛想をつかして消えた。
蒸発したみたいに
突然いなくなった。
父さんは荒れた。
元々酒好きだったけど、母さんがいなくなってから
仕事にも行かずに
毎日お酒ばかり。
僕は家事をしながらバイトをして、学校にもちゃんとでていた。
1日だって
休んだことなんかなかったんだ。
だって休んだらあいつらが家に来るから。

かんかんかんかんかんかん
踏切音が鳴り響く。
ライトが開かずの踏切を照らす。
僕は
ゆっくりと立ち上がった。
線路を前にして、しゃがみこむ。
運転手が僕に気づいてブレーキを踏まないように。
だんだん近づいてくる電車の音。
僕を楽にさせてくれる音。
もう30メートル先に電車はいる。
フラフラと僕は立ち上がって、線路に立ちふさがった。

恐怖なんかなかった。
迷いもなかった。

踏切まちの人たちが叫ぶ。
あぶないぞ
とか
なにしてんだ
とか。
でも助けに来る人はいない。
助けてほしくはないけど。
結局皆、自分のことが大事なんだから。

———白樺爾（しらかばみつる）

「うげぇっ！！もーこんな時間かよ」
時計と空を見比べて、彼は走り出した。
街灯がつき始める。
今日は日曜日。
彼の大スキな笑点が放送される日だ。
といっても興味があるのは大喜利だけだし、ビデオに撮っているので急ぐ必要はまったくない。
しかし、彼は走っていた。
ビデオに撮っているが、とにかく1秒でも早く笑点を見たかったからだ。

彼の住む町には、開かずの踏切がある。
１回閉まってしまえば、１時間近く開かなくなる。
彼は今、ちょうどその前にいた。

遮断機の前で待つ人の人数、いらつき加減で、もうすぐ開くだろうと彼は予想した。
けれど
再び遮断機があがることはないのだろう。
少なくとも彼の目の前では。

線路に立ちはだかる少年。

近づく電車。
人々の悲鳴、罵声。轟音。
微笑んだ少年の笑顔。
涙でぬれた瞳。

すべてを見て、すべてを彼の脳が確認する前に。
彼は動いた。

電車と少年との間はわずか５ｍ。

騒ぐ人々を押しのけて
遮断機をまたぐ。
邪魔をする人々の手を払いのけて
少年に駆け寄り
抱きしめる。

そのまま2人は、宙を舞った。

重なっていた2つの身体が離れる。
2つの影は
別々に落ちる。
1つは遮断機の上にうつぶせになって。
もう1つは警報機の上に頭から。
2つの黒い影はどんどん赤くなっていく。

3日後。
その踏切には、2つの花束が飾られていた。

第1章～2人の少年～（後書き）

ブログで連載していたものを少し手を加えたものです。
すでに完結しているものなので早く投稿できれば、と思います。
あなたさえよければまた。三沢でした。

第2章～灰色の町～（前書き）

踏み切りに身を投げて自殺した渚（なぎさ）と爾（みつる）は・・・？

第2章～灰色の町～

・・・・・・此処は・・・・・どこだろう・・・・・・。

僕は・・・・どうなったんだろう・・・・・。

花の香りが僕を包む。
僕は真っ白な花畑の中で眠っていた。

「・・・・あれぇ・・・・？」
なんでかな。
どうしてだろう・・・・・・。
「涙が止まらない・・・・・」

頬を、僕の目から出たモノがどんどん濡らしていく。
「・・・なんでだよ・・・・。ずっと実行できなかったことが実行できたんだぞ・・・？」
ずっとずっと・・・死にたかった。
やっと実行できたんだ。
やっと楽になれたんだ。
なのに。
なんだよこのモヤモヤは・・・・。

「くそ・・・とまれよ・・・とまれよ！！」
叫んでも、拭っても、止まらない涙は
皮肉にも、それだけが温かかった。

冷たい身体を
涙が温めた。

「・・・・とりあえず・・・・せっかく来たんだ。探検してみよう」
ひとしきり泣いて、やっと涙が止まった。
もう・・・泣かない。
泣く理由なんかないんだから。
瞳にたまった涙を拭って僕は立ち上がった。

花畑を抜けると、町があった。
灰色の町。
「・・・・色が・・・・・ない・・・・？」
建物も
動物も
花も
人も。
すべてが灰色・・・・・。
あわてて自分の身体を見る。
「・・・・僕だけ・・・色がついてる・・・・？」
青いTシャツ。カーキー色の7分丈のズボン。黒と白のボーダーの
スポーツソックス。真っ黒のスニーカー。
灰色の町に浮くように存在する僕。

「・・・というか・・・此処は何処なんだろう・・・・」
死んだということは確かだと思う。
いや・・・そう思いたい。
あんな腐れた世界に、もういたくないから。
「・・・・あの人に訊いてみよう・・・・」
僕の視界に入った、灰色の女性。
髪を後ろに低く1つにまとめている。
表情は――――・・・読めない。

「あ・・・あのぉ・・・ちょっといいですか？ここって一体・・・・・・」
確かに声をかけて
肩を叩いて
目を見て。
話しかけたのに。
素通りはないよ・・・
それでもめげずに話しかける。
「ここは何なんですか？なんで僕だけ色がついているんですか！？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
それでも
反応はなかった。

「・・・・はぁ・・・」
自然とこぼれたため息。
目に付く人という人に声をかけた。しかし、誰も応えてくれなかった。それどころか僕のことすらも見てくれない。
「・・・・どーなってんだよ・・・」
時間の経過が全くわからない。
灰色の町に灯りがついたことで、ようやく夜になったんだと気づく。

「とりあえず・・・ここで寝ればいいか・・・」
そこはビルの廃墟だった。
壁に寄りかかって
目を瞑る。
歩き回って疲れていたのか、僕はすぐに寝付いた。
風の音が子守唄のようにやさしく聞こえる。

第2章～灰色の町～（後書き）

どうでもいいですけど渚って名前は女の子につけたいです。何で男につけちゃったんだろう。
本当にどうでもいいですね。スイマセン。
あなたさえよければ次章でもお会いしましょう。三沢でした。

第3章～2箇所で映える色～（前書き）

白い花の中で目覚めた渚（なぎさ）は灰色の町に着く。そこの人は皆無反応。
廃墟で眠りについた渚は・・・？

第3章～2箇所で映える色～

フと目が覚めた。
まだ真っ暗・・・と思っていたら灰色の街には薄い光が差し込んでいた。
目をこすって立ち上がる。
あいかわらず僕には色がついている。
「あ～・・・やぁっと見つけた・・・」
・・・・・人を求めすぎてついに幻聴を聞くようになったか・・・。
「こんな所にいたんだ。って・・・おーい??」
再び聞こえる声。今度は声の持ち主まで現れた。
スポーツカットの蜂蜜色の髪。ややつり目だがパッチリ開いた琥珀色の目。
赤いTシャツ。黒のズボン。黒のコンバースの靴。
・・・・・幻覚??
「・・・まさか幻聴とか幻覚だとか思ってないよね??」
「ぅ・・・」
図星をつかれてしまった。
「幻聴でも幻覚でもないよ。俺も昨日此処に来た」
「・・・・・・・・・・・」
「詳しく言うと君と一緒に死んだ人。これならわかるっしょ??」
「・・・・・・・・・・」
「あ、ちなみにってのぉぉぉ!?な・・・なんで泣いてんの!?」
「・・・・・・・・・・」
僕の目からはまた涙が溢れていた。
昨日1日をかけて話の通じる人を探した。
どんなに探してもいなかった。
これが死の世界?ここが僕の待ち望んだ死の世界?
此処でもまた孤独を味あわなければならないのか?

孤独が嫌で
僕を孤独にさせるまわりが嫌で
僕を孤独でいさせる世界が嫌で
孤独な自分が嫌で
それで自殺したんだ。
でも孤独だった。
だから・・・嬉しかった。
やっと僕を見てくれる人がいた。
軽蔑心も何もない、純粋な瞳で
僕を映してくれた。
ただそれだけのことかもしれないけど
僕にとってはこれ以上ない喜びだった。

そのことを時々引っかかりながら何とか伝えた。
言い終わる頃にはまた波がきて口を開くことができなかった。
彼は、僕を優しくなだめてくれた。
時々吹く風と一緒に。

「で、これは推測なんだけど・・・」
この灰色の街に来てから3日たった。
ここはビルの廃墟。の隅っこ。
僕の目の前にいるのは白樺（しらかば）爾（みつる）。僕と同じ享年１６歳らしい。
生前はやっぱり僕と同じ古町第2高校に通っていて、いつも僕を見ていたそうな。
・・・見てたんなら助けてくれたっていいのに・・・。
「そいで・・・って渚・・・。聞いてる？」
呆れ顔で僕を見る。

「あ、ごめん・・・で、何？爾くん・・・」
スポーツか何かで日焼けした小麦色の腕が伸びる。
伸びて・・・・・・・

べしっ

「っだ！！」
必殺デコピン。額の真ん中に見事に命中。
「いっだ～・・・・何すんのぉ・・・？？」
銃弾が当たったみたい・・・当たったことはないけれど。
「またくんってつけたなー・・・？？」
笑ってる・・・笑ってるのに目が笑ってない！！
「だ・・・・だってぇ・・・」
「呼び捨てにしろって言ったじゃんか！」
こう言ったら彼は怒るだろうケド。
男である僕から見てもかっこいい。
特に笑ったときと怒ったとき。
きっと生前はモテたんだろうなぁ。
抱かれたいと思った男も少なくないに違いない！
「・・・また話聞いてないし・・・・・」
「あ・・・・」
もうすでに顔は呆れ顔。この顔はこの顔でかっこいい・・・・・・・・・・・・・僕・・・ホモ・・・？
「まぁいいや。ちゃんと聞いてよ？？たぶんここは普通に死んだ人が来るようなとこじゃないんだと思う。例えば俺らみたいな。自殺だったりさ」
「えぇー？？それって確率低くない？」
まぁ確かに天国ではないと思うし地獄なんかでもないと思うし。
天国と地獄って本当にあるのか？
「でもさ、俺ここでお前に会う前に＊ＤＡＹＳの秦（しん）見たぞ？」

「嘘！？僕たちが死ぬ２日前ぐらいに自殺した！？」
「そ。だからさ、自殺人がここに集まるんじゃないっかな～って」

その日はここがどこなのか
ここが何なのかという話だけで終わった。
このとき僕も爾く・・・爾も知らなかったんだ。
この４日後に消え失せることなんて。

＊ＤＡＹＳの秦
　架空の人気グループ。４人で結成されていたが秦が自殺したさい解散。
「道案内」「凍結」が１００万枚売れる。最新曲は「椛」。３週間連続ＣＤ売れ行きトップ。

第3章～2箇所で映える色～（後書き）

勉強のため他の先生の作品を見てきました。
やはり皆様すばらしいですね。
感情表現も、物理的表現も文章の構成も全体的にまだまだだな、と
改めて自覚しました。精進します。
よければもうしばらくお付き合いください。そう長くはならないと
思います。三沢でした。

第４章～そんなこと～

「渚ー起きろー…」
低い、よく通る声が灰色の廃墟に響く。
「んー…爾ク…爾。おはよー？」
声の主は僕と一緒に自殺した爾だった。
眠い目をこすって僕は体を起こす。
この世界にきてから４日目。いい加減知りたい。
元の世界に戻るための。ではなくこの世界の意味を。
すべてが灰色の世界の中で僕と爾だけがフルカラー。
唯一の手がかりは僕らが死ぬ前に自殺したＤＡＹＳの秦。彼がここにいること。
そこで爾の考えだけど、ここは自殺した人がくる場所なんじゃないか。という推測だ。
確か生前読んだ本では自殺した人は死神になるって書いてあったけど…。実際それが嘘なのか本当なのかわからないし証明した人だっていない。当たり前だが。

とにかく廃墟でボーっとしてるわけにもいかないから、僕と爾は廃墟から出た。
灰色の町にはあいかわらず灰色の人がたくさんいた。
なんだか自分たちだけ違うみたいで。
まぁ実際違うんだけど。
僕たちは人ごみから逃げるように灰色の水が吹き出る噴水のある広場に来た。
「渚、どーするよ。このままじゃ何も手がかりがつかめないよ」
爾が僕を見ながら言う。
爾は背が高い。僕が小さいだけかもしれないが、とにかく背が高い。
僕が１６４ｃｍなのに対して爾は１７６ｃｍだ。

「どーするって…どーしようもないよ。誰もしゃべらないんだもん」
こっちに来てからずっと灰色の人に話しかけるが返事はない。
というより僕らに気づいていない。話しかけても、体を揺さぶっても無反応。
僕の返事に不満だったのか、爾は唇をとがらせる。
「気になるじゃん、やっぱ。どー考えても天国でも地獄でも、ましてや現世でもないんだから」
「それはそうだけど・・・」
そんなこと僕に言われてもどーすることもできない。
しかし、僕らはたった数分の間に自分たちの運命を知ることになる。
何か手がかりはないかとキョロキョロしていた爾が、視線をとめて
「あ」と言った。
「？何かあった？？」
期待を込めて僕は爾を見上げて訊く。
「あれ…あの人見てみろ・・・」
爾が指差した方向を見る。
そこにはフルカラーの人がいた。よく見ると見覚えのある人。
「ＤＡＹＳの秦！！？」
思わず僕は叫ぶ。爾は何も言わない。ただ少しだけ震えている。その震えの意味が僕はわからない。よっぽど秦が好きだったのか、それとも何かを悟ったのか。
爾はＤＡＹＳの秦から目をはなさない。僕もじっと見つめる。
秦は、両手を空に伸ばして何かを掴むように空中で手を握り締めた。
そしてその瞬間。

秦の体が光った。

光はどんどん秦から離れていく。どうやら秦の体の中から発せられているようだった。
そしてやがて、光は完全に消えうせた。

「渚…嘘…だよな??だって…あんな…あんな・・・・・・・・・・・・」
爾の言葉が震える。僕も体がヤクザににらまれたみたいに震える。
秦の体からすべての光が出し尽くしたみたいだった。
秦は灰色の人になっていた。

その夜、廃墟に戻った僕たちは一言も会話を交わさずに寝た。
話さなかったんじゃない、話せなかった。言葉も出なかった。
爾の寝息が聞こえる中、僕は灰色の廃墟の天井を見ながら小さくため息をついた。
当たり前になってきた。誰かが隣にいること。
生きているときに当たり前だったのは1人でいることと投げかけられる罵声だ。
誰からも愛されずに、誰の瞳にも映してもらえずに、誰の心にも僕は存在していなくて。
実の親さえも僕を嫌い、憎しみ、貶した。
僕は誰にも心を開かず、誰の目も見なくて、1人で生きていた。
食事だって1日1回。夜親が寝たときにこっそり台所をあさるだけ。
学校に給食なんかなかったから昼休みは屋上で空腹を紛らわすために昼寝した。
バイトは禁止だったから自分でお金を稼ぐこともできなかった。度々親の財布から野口英世さんを数枚抜き出してどうしてもおなかが

すいたときに購買でパンを買った。
ただ、使う分だけ持っていかないと盗られる。
隠れた生活。１人っきりの生活。他人の目を恐れる生活。
そんな生活を捨てたかった。
誰も僕を見てくれなくて、僕も自分を見ていられなくてなんとなく生きていた生活が嫌だった。
自殺はそんな生活をなくす手っ取り早い解決方法だった。
１人で生きてきたんだ。死ぬのだって１人で死にたい。
鉄道自殺ならいろいろとお金が請求される。僕を見てくれなかった親に最初で最後の迷惑をかけたかった。
考えてもいなかった。だってずっと１人だったんだ。
・・・・僕を見てくれる人がいたなんて知らなかったんだ。
最期に覚えているのは爾のぬくもり。一瞬だけだったけど触れた人の温かさ。
ずっと知ることのなかった人の体温。
もっと触れていたかった。
それからここにきた。１人っきりでここにきた。
それから爾に会って、２人になって・・・・・・・・・。
人のぬくもりなんて知らなければよかった。知らなければこんな気持ちにならなかったんだ。
涙があふれるほどの、悲しみ。
消えたかったはずなのに
消えたくないと思う僕がいた。
爾と一緒にいたいと思った。

君がいなければ価値のない僕だから。

僕たちが離れるまで
あと４８時間。

第4章～そんなこと～（後書き）

計算してみたらあと2章みたいです。
1章でも十分な字数ですがわかりにくくなりそうなのでわけたいと思います。
感想、評価いただけると嬉しいです。脳内補給になります。三沢でした。

第5章～あと少しだけ～

灰色の光。灰色の窓から淡く差し込む。
いつの間に眠りについたのだろうか。
隣を見れば爾はまだ目を瞑っていた。灰色の日光が彼を優しく包む。
「爾、みつるー」
爾の肩を揺さぶって声をかける。しばらくそうしていると、彼は眠たげにゆっくりと目をあけた。
「な・・・ぎさ？」
自然と僕は笑っていた。

「俺の推測と計算でいけば、自殺した人間。または何らかの理由で死んだ人間は皆1回ここにくるんだ。俺たちが死んだ日と秦が死んだ日。照らし合わせてみれば俺たちが秦みたいになるのは・・・・・・明日だ」
明日。明日には僕たちは・・・・・・どうなる？
「約1週間ってとこだね。1週間で色が消える。灰色になる。ここにいる灰色の人たちも最初の1週間は色がついていたはずだ」
あぁ、なるほど。これで灰色の人の意味はわかった。僕たちがどうなっちゃうのかもわかった。
「要するに、感情のない生物。いや、物体になるってことでしょ」
「いや、それは違うと思う。あの時秦の体から出ていた光り。あれ、何だと思う？」

何だと思う？って・・・そんなのわかったら苦労しないよ。秦の中から出てきたってのはわかったけど。・・・でてきた？あれがでていったら感情も何もない灰色の人になるってことだよ・・・ね？ってことはもしかして・・・・・・

「魂・・・・とか？」

「ビンゴ」

爾がにやっと笑った。その笑みの意味がわからない。

「渚は死んだらどうなると思ってた？」

死んだら？ってことは生前に抱いていた死の世界のイメージ？

「えぇっと・・・消えちゃうとおもってた・・・と思う。昔読んだ本では自殺したら死神になるって書いてあったから僕も死神になったりするのかなーって・・・」

魂を狩る。楽しそうだと思った。

「まー俺も似たようなもんだったな。じゃあ実際死んでみてどうだ？少なくとも消えるってことではない。だって俺も渚も現世ではないにしろここに存在している。じゃあ2つ目、死神説。これも違う。俺らは鎌もってないし魂狩んないし何より現世に行ってない」

そう。僕が生きているころに考えていた説はすべて嘘、だということだ。まぁたしかに死んで証明した人なんているわけないけどさ。

「僕たちは・・・どうなるの？」

魂が肉体（というか今のこの体）と離れるのなら。今度はどうなるんだろう。

「・・・それはわからない。それを推測するのは生前に死んだらどーなるのかを考えるのと同じことだ。なってみないとわからない」

そうか。推測はあくまで推測で、究明しないとわからないことなんだ。どんだけ想像を膨らましたって、現実はどうなるかわからない。

神のみぞ知る　ってことか。

「でもこれだけはいえるよ」

「・・・？」

「灰色の人間になっても渚と一緒にいられる可能性があるってこと」

それから爾は照れくさそうに笑った。

あと２４時間。
あと２４時間で僕たちは消える。
でもかすかな希望がある。消えても一緒にいれるかもしれない。そんな希望。
もしかしたら２４時間もないかもしれない。少しだけ、消えるのが伸びるかもしれない。
だから少しでもたくさん
爾の声をきいていたい。
爾のことを見ていたい。
だってはじめて僕を認めてくれた人だから。

第5章～あと少しだけ～（後書き）

ここまでお付き合いくださってありがとうございます。次章で終わりです。
最後までお付き合いください。よろしくお願いします。三沢でした。

最終章～白い花～（前書き）

最終章です。どうぞお付き合いください。

最終章～白い花～

爾の計算でいけば僕たちが消えるのは　今日　だ。
最期ぐらいこんな廃墟から抜け出して。どうせなら綺麗なところで。
2人向かった所は白い花畑。
「渚」
爾がつぶやいた。
「爾」
僕がつぶやいた。
「・・・ぶふっ」
爾が吹き出す。
「・・・っぷ」
僕が吹き出す。
それから2人一緒に大笑いした。
「ぶはははっ暗いっつーの。キャラじゃねぇよなー」
「あはははは。本当だよねー。爾があんな顔でしゃべると怪しい宗教勧誘の兄さんみたいだよ」
「それどーゆー意味だコラ」
花畑に倒れこんで空を仰いだ。灰色の町とちがって、空が青い。花だって綺麗に色づいている。
そうだ。ここに初めてきたときもこの眺めだった。横に手を伸ばせばたくさんの白い花。天を見れば高く、青く澄んだ果てしなく続く空。
あの時と全く同じ服。あの時と全く同じ風。
違うのは隣に爾がいること。それから・・・今僕が笑っていること。
「最期ぐらい綺麗なとこいきてぇって思ってよかったー。俺この花のにおい大好きだ」
爾が大の字になって寝転びながら風の音にかき消されないように大きな声で言った。

におい・・・か。
僕は胸いっぱいに花の香りを吸い込んだ。
爾の髪の香りに似ていた・・・・・・・・。
「爾・・・僕ね、爾に会えてよかったと思ってるんだ。爾がいなかったら僕、今どうなってるかわからない。もしかしたら・・・ううん。絶対まだ町の人に声かけてる。パニック状態で、混乱してて・・・絶対今みたいに笑ってない。だから・・・その・・・何て言うのかわかんないけど・・・僕・・・・・・・・・・・・・・・・・・爾？」
隣に爾はいなかった。
僕は起き上がって辺りを見回した。
「み・・・爾・・・？爾・・・・爾っ！」
どんだけ名前を呼んでも、どんだけ辺りを見回しても、爾はいなかった。
消えたのか。消えてしまったのか。
時間がきたのか。時間がきてしまったのか。
「なん・・・・なんで爾だけ？僕は？僕は！？何で僕は消えてないの！！？」
僕の問いに、誰も答えてくれなかった。どんなに叫んでも、風の音にかきけされるだけだった。
「・・・・ったえてよ・・・答えてよっ！！いつも爾答えてくれたじゃんかっ！」

さっきまで笑っていたはずの僕の顔は

今はもうその面影すら残さずに

「みつる――――っ」

白い花びらが舞いました。１人の人間の叫びとともに舞いました。
風と共に踊る花びら。いつまでも変わらない風景。
白い花はすべてを知っています。すべてを記憶しています。
１人の人間がきたことも、花の上で涙を流したことも、灰色の町に入っていったことも、別の人間と出会ったことも、花の上で笑ったことも、叫びも。消えていったことも。
そしてその記憶はやがて白い花びらとなって宙を舞いました。

最終章～白い花～（後書き）

今まで読んでくださった皆様、ありがとうございます。
まだまだ未熟ゆえ、思い通りにいかなくてイライラすることもありましたがなんとか最終章を迎えることができました。
これからもこのサイトにはお世話になろうと思っています。感想、評価いただけると嬉しいです。喜びます。栄養にもなります。
縁があったらまた。三沢でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5162a/

狭間の世界の白い花

2010年10月28日04時47分発行